



# Newsletter

NO.31

MARCH 2013



## 『甕海魚譜』

小濱亜由美さん（九州産業大学非常勤講師）は、美術史学を学びながら、ご自身も画家として活動されています。小濱さんの博士論文は、鹿児島の魚類学史上重要であり、絵画資料としても興味深い『甕海魚譜』の美術史的研究をテーマとしています。本ニュースレターでは、小濱さんの研究成果の一部を分かりやすく紹介して頂きます。また、小濱さんの魚類に関する絵画作品の紹介も合わせて掲載致しました。

## contents

- 『甕海魚譜』について .....小濱亜由美 (1)  
 魚類学的視点からみた『甕海魚譜』 .....本村 浩之 (11)

げいかいぎよふ  
『**麿海魚譜**』について

小濱亜由美

## はじめに



図1 『麿海魚譜』アオブダイ

「鹿」と「児」を合わせた「麿」は、一字で鹿児島のことを意味します。つまり「麿海」は「鹿児島海」を表しています。また「魚譜」は魚を描き表した図のことであるため、『麿海魚譜』は鹿児島海に生息する魚の図鑑と言い換えられます。『麿海魚譜』には魚以外にも甲殻類や貝類が掲載されているため、魚介譜の介が省略されたものと考えられます。

『麿海魚譜』は、鹿児島県勸業課が県の勸業促進を目的に作成し、明治16(1883)年に東京上野で開催された第1回水産博覧会に出品したものです。鹿児島県令渡辺千秋の命により、編纂者白野夏雲のもと、2人の画師木脇啓四郎と二木直喜が作画しました。鹿児島県勸業課が同博覧会から褒賞を授与されたのは『麿海魚譜』を含む計6点で、魚譜をはじめとする図書類の審査では最高評価である3等賞状が与えられました。肉筆彩色本と325図からなるモノクロの刊本が、ともに出品されました。

そのうち、鹿児島県立図書館所蔵の肉筆彩色本『麿海魚譜』の、縦29.5cm 横39.6cmの3冊に収められた344図の海洋生物の存在感は極めて優れ、当時編纂をおこなった鹿児島県勸業課の編纂者や画師の意気込みが今もなお伝わります。その描写は精緻で写実性にあふれ、生き生きとした美しい彩色がほどこされ、単なる博物図を越えた美術作品といえます。

そのうち、鹿児島県立図書館所蔵の肉筆彩色本『麿海魚譜』の、縦29.5cm 横39.6cmの3冊に収められた344図の海洋生物の存在感は極めて優れ、当時編纂をおこなった鹿児島県勸業課の編纂者や画師の意気込みが今もなお伝わります。その描写は精緻で写実性にあふれ、生き生きとした美しい彩色がほどこされ、単なる博物図を越えた美術作品といえます。

## 項目1. 『麿海魚譜』の概要

『麿海魚譜』が出品された第1回水産博覧会は、明治16(1883)年に東京の上野公園内で開催されました。明治維新後、明治新政府は殖産興業政策に力をいれ、自国の産業や文化を把握し、発展させることに力を注ぎました。その一環として欧米先進諸国で開催された万国博覧会を学び、また国内において内国勸業博覧会を開催するなど、博覧会事業に積極的な姿勢をとりました。このような博覧会事業には、薩摩藩主島津斉彬の意志を受け継いだ鹿児島県出身者の活躍があります。第1回内国勸業博覧会の開催を提唱した大久保利通をはじめとし、博覧会、博物館事業に尽力し、後に東京国立博物館初代館長となった町田久成などがいます。産業や文化などの各分野に関する博覧会も開かれるようになり、このような背景のもと、水産関係でも水産博覧会が開催されました。水産博覧会は農商務省の水産課が主管であり、当時の農商務卿もまた鹿児島県出身の西郷従道(1843～1902)でした。なお、西郷従道は西郷隆盛の実の弟で、維新後に海軍大臣や内務大臣を務めた人物です。

ここで着目したいことは、水産博覧会に『麿海魚譜』などを出品した鹿児島県勸業課の意気込みの大きさです。中央で活躍する町田久成や西郷従道の意を十分に汲み、この博覧会を成功のうちに終わらせることは、鹿児島県を全国に誇るために課せられた重要な仕事であったと思われる。

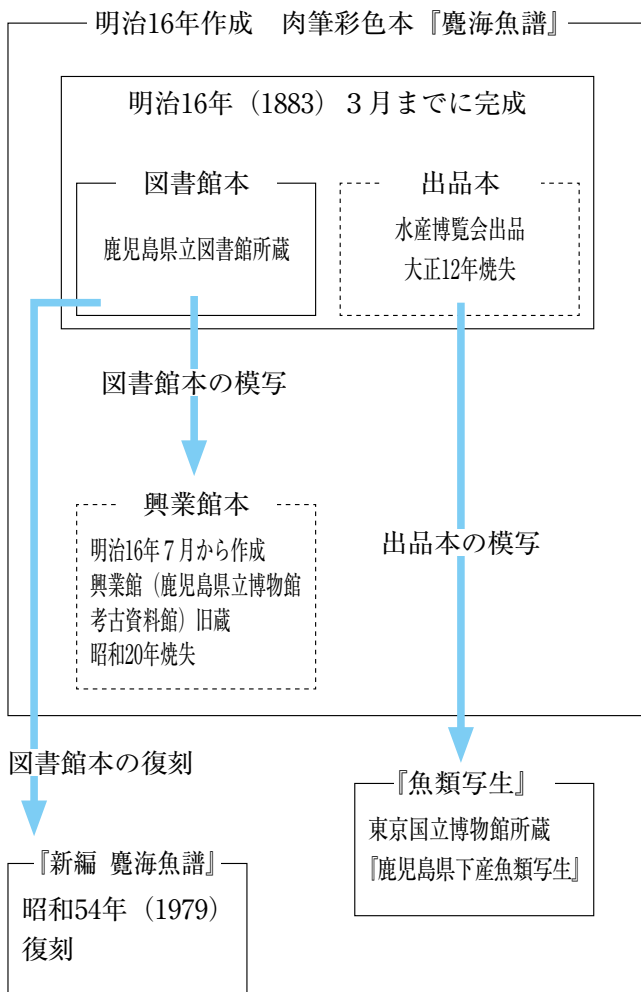
この水産博覧会の開催期間は、明治16年の3月1日から100日間で、全国から総計14,581点の出品物が集められ、来観者は23万人を数えました。また、少なくとも12の都道府県から魚譜が出品されました。

## 『麿海魚譜』諸本の状況

『麿海魚譜』の諸本の関係を【図2】に示しています。『麿海魚譜』には、肉筆彩色本とモノクロの普及用刊本の2種があります。肉筆彩色本の『麿海魚譜』は、明治16(1883)年に鹿児島県立図書館所蔵本と水産博覧会出品本が作成されましたが、現在、所在が明らかなのは図書館本のみです。出品本は、大正12(1923)年の関東大震災で焼失しました。その後、図書館本からの模写が作られ、興業館(鹿児島県立博物館考古資料館)に所蔵されましたが、これも昭和20(1945)年の戦禍で失われました。

出品本が現存しないことは述べましたが、その一部は模写され、現在、『鹿児島県下産魚類写生』として東

## 肉筆彩色本『麿海魚譜』の作成、模写、復刻の状況



## 刊本『麿海魚譜』の発行状況

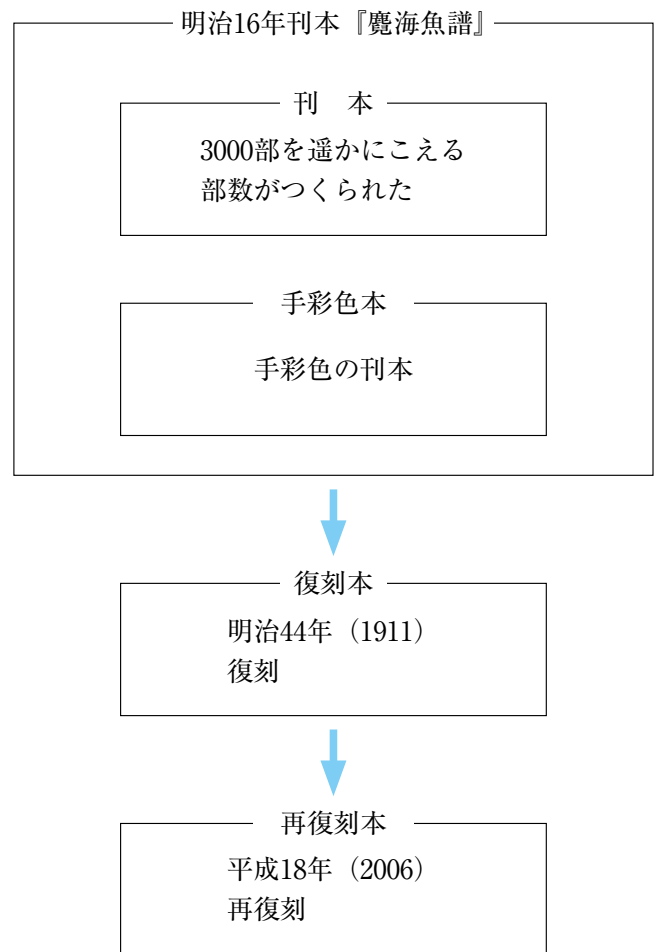


図2 『麿海魚譜』諸本の状況

京国立博物館に所蔵されています。出品本から約3分の1の図をトレースしたものです。また図書館本の復刻が、昭和54年に鳥津出版会からなされました。

もうひとつの明治16年に作成された刊本は、銅板によるものでモノクロです。上下2巻からなり、計325図が収められました。明治44年の記録から、3000部を遥かにこえる部数が作られたことがわかります。また、刊本に手彩色を加えた本がつけられることもありました。この手彩色本は和綴全1巻で、キラ（雲母）を用い、肉筆彩色本と同じような彩色が施されています。

その後、明治44年に鹿児島県立第一鹿児島中学校から復刻本が出版され、近年でも平成18年に再復刻本が印刷されました。

## 刊本の「まえがき」

肉筆彩色本には「まえがき」などは書かれていませんが、モノクロの刊本には「まえがき」があります。「まえがき」には、鹿児島県勸業課が『麿海魚譜』などを水産博覧会へ出品する経緯や目的などが記されています。

刊本題字「恩加水族」は、水産博覧会を開いた農商務省の長官である西郷従道自らが筆をとって書かれたものであり、『麿海魚譜』の作成に力をいれていたことがうかがえます。さらに、鹿児島県令渡辺千秋による「序文」、編纂者白野夏雲による「緒言」と「凡例」と続きます。「緒言」と「凡例」には、「(魚譜配列の)順序はシーボルト博士にならった」と記され、西欧の魚譜という当時最先端の科学的な本を参照していることがわかります。

## 項目2. 本草学・博物学的側面

### 図鑑の挿図の歴史

現在の動植物図鑑などは写真を用いているものも多くありますが、カメラやコピー機のなかった時代の図鑑(図譜)はどのような挿図が用いられていたのでしょうか。ここでは『寔海魚譜』(明治前半期)以前の図譜について記します。

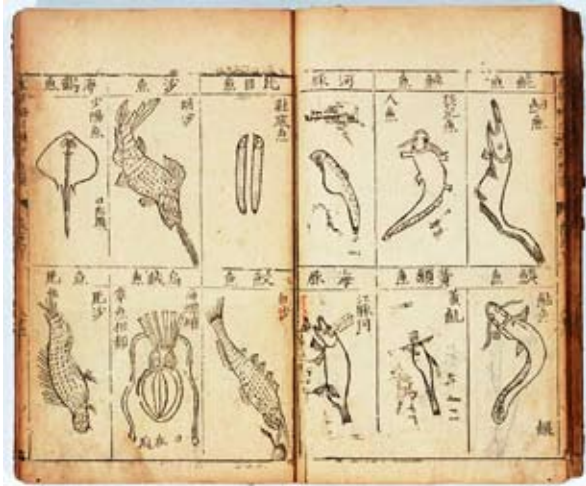


図3. 『本草綱目』



図4. 『大和本草』



図5. 『日本魚譜』

初期の図譜は、本草学にみられます。本草学とは中国に由来し、明治時代にはすでに日本に根付いていた学問です。動植物のうち、植物を例にあげると、種の同定や食べることができるかどうか、薬用植物であれば、薬としての効用などを図を併用し記録していました。それが「本草図」です。

近代に近づく、西洋から博物学が入ってきました。西洋の博物学は東洋の本草学にあたるもので、近代以降、日本では本草学にかわり博物学と称されるようになりました。その図譜は「博物図譜」や「博物画」などといわれ、植物に限定すると「ボタニカルアート」などと称されます。

### 魚譜の数

以下に代表的な本草書、魚譜(魚類図譜)を紹介します。どのくらいの魚譜が作成されたのか確かな記録はありませんが、おそらく数百を超えるものと思われます。コピー機やカメラがなかった時代では、手写も多く行われていたからです。

明治16年の『寔海魚譜』以前に描かれた本草図や博物図にみられる魚図を、時代を追ってみていきます。

### 『本草綱目』

日本の本草書に大きな影響を与えたのは、慶長9(1604)年頃までには日本に持ち込まれていた中国の李時珍撰『本草綱目』(初版 金陵万曆24・1596年刊)です。日本で独自に本草書がつくれる以前は、このような中国の本草書を模写していました。図は植物が主で、魚や虫などの動物も掲載されています。そのうちの魚は、【図3】にみえるように体をくねらせ、斜めの構図です。

### 『大和本草』

『本草綱目』などの中国から伝わった本草書を写すことにとどまらず、国内においてはじめて実地調査に基づいて編纂された本草書が貝原益軒の『大和本草』(宝永6・1709年)です。『大和本草』の図を掲載した『大和本草諸品図』(正徳5・1715年刊)は、著者益軒の没後に出版され、動植物図のなかに魚図も含まれています。

『大和本草』をはじめ、初期の本草書に載せられた動植物図は、挿図的な役割を担うものであり、魚図もその例外ではありませんでした【図4】。

### 『日東魚譜』

享保4(1719)年に作成された神田玄泉著『日東魚譜』は植物や動物を含まず、魚類のみで作られた日本で最初の魚譜です。のちに数回改訂され、それぞれ内容が異なっています。【図5】は、嘉永7(1854)年の年紀がある写本で、背景には波が描かれ、海の中で魚が生き生きと泳いでいるように描かれています。

### 『三州物産絵図帳』

『三州物産絵図帳』は鹿児島ではじめて編纂された本草書で、魚図も描かれています。「三州」とは、薩摩・大隅・日向のことです。享保20(1735)年、幕府の命により、はじめて全国的な諸国産物調査が行われ、薩摩藩が編纂をしたのがこの『三州物産絵図帳』です。幕府への献上本自体は現存していませんが、その控えが、鹿児島県立図書館に所蔵されています。

『三州物産絵図帳』の動植物図は、植物が中心ですが、魚図も103図含まれています。薩摩藩に仕えた3人の絵師によって描かれたことがわかっています。この幕府による諸国産物調査において、全国に本草書の作成が命じられたため、各地に本草学が広がりました。

『三州物産絵図帳』の魚の描写は、原則として真横から描かれていますが、一部には動きを示すように体や尾鰭をくねらせる図もあります。これは、幕末にいたるまで本草学の基本文献として重んじられた『本草綱目』の魚図【図3】が、体をくねらせた斜めの構図であることと傾向が重なります。『三州物産絵図帳』のエイ図【図6】は、2匹のエイが戯れながら泳いでいるように見せつつ、実は体の表と裏をうまくみせるという工夫がなされています。

### 『衆鱗図』

江戸時代の中頃から、大名や本草学者などにより盛んに諸図譜が作られるようになると、動植物図の一部としてではなく、魚介類だけで編纂される魚譜、いわば魚類図譜も数多く作られました。それにとまって、単なる挿図以上の、絵画としても洗練された表現が求められることもありました。そのなかでも代表的な魚譜として、明和4(1767)年頃の『衆鱗図』があります。『衆鱗図』は、高松藩主松平頼恭の命により編纂された博物図譜のひとつで、美的技巧をこらし、極彩色に銀箔や金箔を用いて描かれています。全部で652品あります。

タイ図【図7】を例にみると、魚体には銀箔の下地の上に彩色がほどこされています。ただし、鰭(胸鰭、腹鰭、背鰭)の部分には銀箔の下地がほどこされていません。また、日本画に使用される胡粉という顔料を用い、鰭条や歯を部分的に盛り上げています。その他、各図は輪郭に沿って切り抜き、台紙に貼りつける巧妙な技法が用いられています。

この『衆鱗図』の模写例は多く、その後のさまざまな魚譜の編纂に大きな影響を与えました。



図6. 『三州物産絵図帳』



図7. 『衆鱗図』



図8.『日本動物誌』魚類編

### シーボルトの『日本動物誌』魚類編

刊本『麿海魚譜』の「緒言」と「凡例」には、「(魚譜配列の)順序をシーボルトにならった」と記されています。シーボルトの『日本動物誌』魚類編の出現は、わが国の魚譜の歴史の変遷においても象徴的な出来事のひとつです。

シーボルトや歴代オランダ商館長らとも親交があったのは、8代薩摩藩主の島津重豪です。重豪は学問を好み、開明化政策をとり、また先述した『衆鱗図』の編纂を命じた高松藩主松平頼恭などとともに、博物大名のひとりとしても知られています。重豪は薩摩藩を江戸時代本草学の重要な拠点にした人物でもあります。

『麿海魚譜』がつくられた時代に明治政府で活躍した県出身者を育てた11代薩摩藩主島津斉彬(1809～1858)は、こうした蘭学、実学に力を入れていた曾祖父重豪の影響を受けています。重豪がシーボルトと面会した際に、当時18歳であった斉彬も同行しています。

シーボルト『日本動物誌』魚類編の図【図8】には、中国絵画にみられるような、生きている時の姿を感じさせるような形態描写はみられず、フォルムに動きはありません。またすべての鰭は開かれた状態で、補足図が添えられているものもあり、種としての特徴を科学的に説明するという西洋の学術的な緻密さが反映されています。魚類編の図は160図あり、このような図様は、『麿海魚譜』の中にも多く用いられています。

### シーボルトの『日本動物誌』魚類編と『麿海魚譜』

刊本『麿海魚譜』の「緒言」と「凡例」に、魚譜配列の順序をシーボルトにならったと記していますが、具体的な作画においても、『麿海魚譜』が近代的な魚譜であるシーボルトの『日本動物誌』魚類編に影響を受けている可能性が考えられます。

この両者の図の類似点について具体的に検討してみると、両者のアカグツは、形において似ていることはいうまでもありませんが、シーボルトの魚類編の図【図9】では、補足図として尾鰭を側面から描いたものが添えられており、『麿海魚譜』の図【図10】でも同じく側面からの図が加えられている点が近似しています。

またヌタウナギでは、双方とも正面図を描く点で共通しています。このような類似点がみうけられることから、魚類編を一部参考にして『麿海魚譜』を作画したのではないかと推察しています。

### まとめ

ここで「項目2. 本草学・博物学的側面」についてまとめます。海洋生物の生きている姿を水槽や水族館など、ガラス越しに観察することができなかった時代に編纂された魚譜は、市場に並べられた魚をどのように描くのか、各々の魚譜によって違いがみられます。



図9.『日本動物誌』魚類編

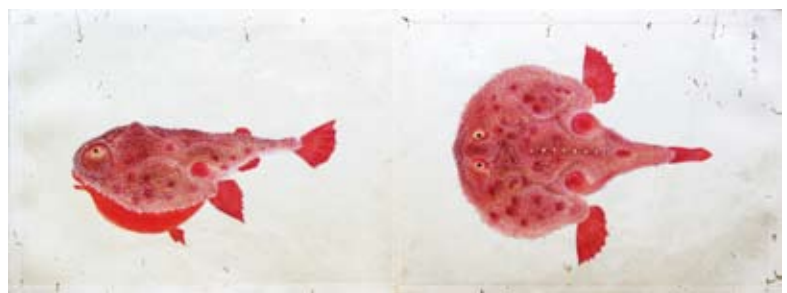


図10.『麿海魚譜』

例えば、①生きた生態を意識して泳いでいるように描くこと、②泳いでいるようなフォームではないが生きていることを意識して美しい彩色をおこなうこと、③命のない姿をそのまま描写すること、などの違いがあります。

それは、編纂を命じた者や編纂者、画師の意図や意識にゆだねられた部分であり、それぞれの時代の絵画の傾向をも反映しているのではないかと思います。初期の魚図は、水中を泳いでいるように描き、また挿図としての説明的な役割でしたが、次第に金箔や銀箔を用い、鑑賞にも堪え得る作品といえる魚譜もあらわされました。そして、西洋の影響が強まるにつれて科学的要素が強くなっていきました。

『魔海魚譜』の図は、『三州物産絵図帳』の中国絵画にみられるような、生きていることを感じさせる形態描写はなされておらず、むしろ、新来の近代的なシーボルト『日本動物誌』魚類編の図のような、水平の構図で、フォームに動きはなく、すべての鰭を開いた状態に描いています。また『魔海魚譜』の図には、『三州物産絵図帳』や『衆鱗図』にはない補足図も添えられていることなどは、種としての特徴を示すという西洋の学術的な緻密さを心がけた結果といえます。

以上のように、『魔海魚譜』は薩摩藩の既存の本草書であった『三州物産絵図帳』を作画の折の参考資料としながらも、一方では、『三州物産絵図帳』やこれに類するその他の魚譜を越えた手法や表現を取り入れることを意図していたのではないのでしょうか。そして、その新しい手法が、刊本『魔海魚譜』の「緒言」と「凡例」に記されているように、シーボルトの『日本動物誌』魚類編を参考とすることであったと思われる。また、同藩は本草学、博物学が伝統的に盛んであり、藩主が他藩に先んじて近代化政策に力を入れていました。『魔海魚譜』は、刊本の「緒言」に記されているように、鹿児島県の特産の状況を広く国内に紹介することを目的としており、当時の鹿児島の特産性を誇る意図があったため、より近代的な魚譜に仕上げる必要とされていたと考えられます。『魔海魚譜』は薩摩の伝統的な本草学や絵画を素地とし、併せて近代的な知識や技法を取り入れた魚譜といえます。

### 項目3. 『魔海魚譜』のその後

少し視点を変えて『魔海魚譜』について考えてみますと、明治時代に産業や文化など様々な分野で新しい西洋の手法が取り入れられたのと同様、日本の博物学は、近代的な博物学が導入される際に、江戸時代から続く本草学がすでに根付いていたことで、新来の博物学にうまく順応できたのではないかと考えています。明治16年に完成した『魔海魚譜』は、博物学的な視点にもとづく日本における魚類図鑑の先駆例にあたるもので、当時の世界における魚類分類学の知識も多少なりとも考慮された魚譜であると思われる。

#### 『グラバー図譜』

『魔海魚譜』の後につくられた魚譜について少し紹介します。『魔海魚譜』は、シーボルトの『日本動物誌』魚類編を参照していることは先に記しましたが、同じくシーボルトの『日本動物誌』魚類編との関連が指摘されている魚譜に、『グラバー図譜』

【図11】があります。『グラバー図譜』は、トーマス・B・グラバーの息子である倉場富三郎（トーマス・A・グラバー）（1870～1945）が、シーボルトが日本を去ってから約80年後の長崎で編纂にとりかかり、明治末から昭和初期の約20年かけて完成しました。全32集801枚からなり、5人の日本人画家により細密に美しく描かれ、博物学と美術の両面で高い評価を得ています。



図11. 『グラバー図譜』

### 『大日本魚類画集』

昭和期（戦前）には、大野麥風(1888～1976)が原画を手がけた『大日本魚類画集』がつくられました【図12】。1937年以降各回12点、6期に分けて継続的に出版された木版画集です。大野麥風は水族館に通うだけでなく、和歌浦沖合で潜水艇に乗り込み、そこで見られる生物の生態観察をしたといわれています。そのため、生態観察による図であることに重きがおかれています。なお、日本で最初的水族館は、『甕海魚譜』が出品された第1回水産博覧会開催の前年、明治15(1882)年に開設した上野動物園内の小水族館「観魚室」です。また、わが国で最初の本格的な規模・内容の水族館は、明治30(1897)年の第2回水産博覧会中に開館した和田岬水族館です。大野麥風の『大日本魚類画集』は、水族館などの普及により、より身近に観察することができるようになったことが反映されたといえます。

今日の魚類図鑑は手描きの図もありますが、カメラの登場により、写真を使用することが主流となっています。また、より専門性の高い魚類分類学分野で種の同定をおこなう際は、各々の種の細部の構造をわかりやすくみてとれるモノクロの線画を用います。鑑賞目的や学術目的など、それぞれの意図に応じて描き方も異なるといえます。



図12. 『大日本魚類画集』「ホウボウ」

## 項目4. 私の絵画制作



作品1『ほうぼう』 2008年 S100 (162×162cm)

私は、魚譜についての歴史や諸学の研究を学ぶ中で、そこから得られた知識などを今後の制作にも活かすことができるよう精進していきたいと思っています。ここではこれまでに制作した絵の一部について紹介します。

### 作品1

『ほうぼう』【作品1】は、前に記しました大野麥風の『大日本魚類画集』「ホウボウ」【図12】に想を得て描きました。ホウボウは、3対の軟足（胸鰭遊離軟条）を使って海底を歩くのが特徴で、水からあげると重力で体が地面につきます。“足”の先端に味雷があり、歩くことによって海底の餌を探しています。本作品では、より水中での生態、浮遊感を描くことに重きをおきました。

もうひとつ着想を得た絵は、伊藤若沖の作品である『動植綵絵』の『群魚図』(1766年)【図13】で、これは海洋生物を集め画題とした初期の絵画であると思われます。伊藤若沖は、京都高倉





図13. 伊藤若冲『群魚図』

錦小路の青物問屋の長男として生まれ、家督を次弟に譲って画業に専念し、古画の研究も行いました。また、本草学者木村兼葭堂(1736～1802)と交流があったこともわかっており、本草学の知識にも通じていたと考えられます。

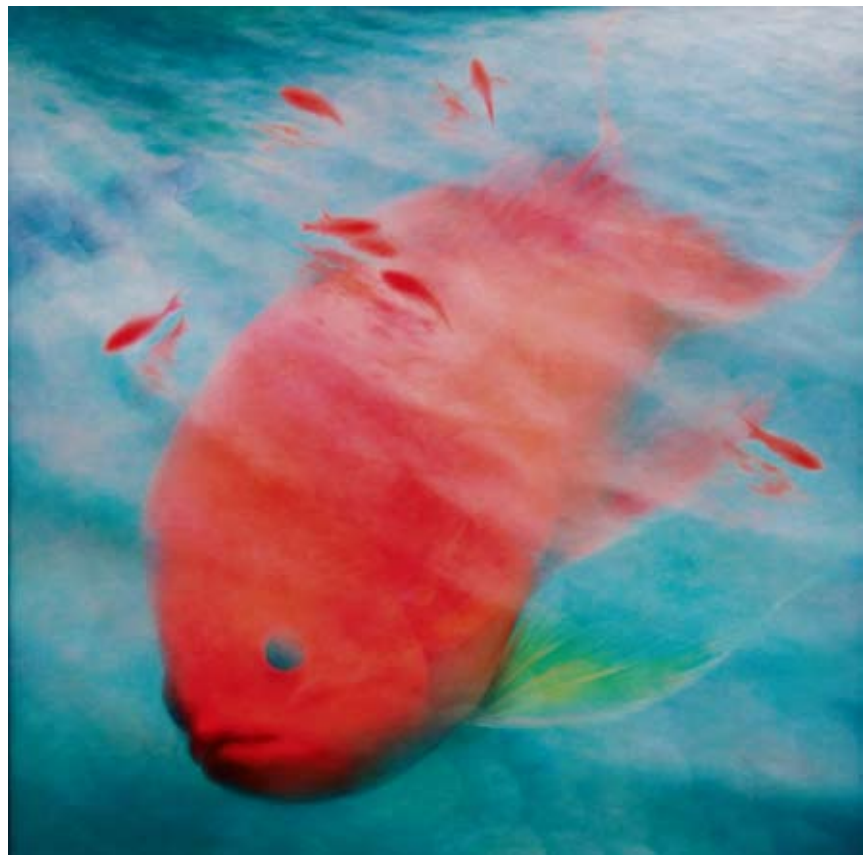
この伊藤若冲画『群魚図』(【図13】の矢印)は、大きなタコの足先に小さなタコがくっついています。私は、このような若冲の遊び心に魅力を感じ、大きなホウボウの周りに小さなホウボウ【作品1の部分】を配しました。

### 作品2

この赤い魚【作品2】はアカオビハナダイといい、桜島の周辺で群れをなして生息しており、鹿児島湾を代表する魚であるともいわれています。この作品では、周りを泳ぐ小さな魚を、桜島の裾に沈む夕日が美しく水面に映る姿にみたてて描きました。



作品1の部分



作品2『あかおびはなだい』 2010年 S100 (162×162cm)



作品3 『ももいろかぐやハゼ』 2013年 F8 (45.5×38cm)

桜島は、刻々と様々な色彩の変化をみせ、また良し悪しがありますが活火山で、雄大で活発な姿は、鹿児島の人々の活力の源でもあると思います。その存在は鹿児島を象徴するもののひとつで、また下方に広がる鹿児島湾の水深が湾奥部で230mにも達するという奥深さにも魅力を感じます。

海洋国家である日本にとって、海洋生物は古来より親しまれてきた文物の一つであるといえます。私は、海洋生物の色彩やフォルムのすべてに意図があり、そこに洗練された美しさを感じます。別世界の生き物を主題とする際には、その世界へと引きこまれ、作画すること自体が創造的に感じます。

### 作品3

2009年に鹿児島市東桜島町沖（水深62m）で撮影された新称「モモイロカグヤハゼ」の画像を見せていただき制作しました。全長3～5cm位だそうで、鮮やかな桃色が印象的です。このようなきれいな魚が発見されたことに大変驚きましたので、表現としては主題と調和する背景となるようシンプルに描くことを心がけました。

本稿の作成にあたっては鹿児島県立図書館、早稲田大学図書館より掲載許可などの便宜を図っていただきました。記して謝意を表します。

### 主な参考文献

鹿島晃久編『新編鹿児島海魚譜』 島津出版会 昭和54年

上野益三『薩摩博物学史』 島津出版会 昭和57年

上野益三『日本博物学史』 平凡社 昭和48年  
 磯野直秀『日本博物誌年表』 平凡社 平成14年  
 磯野直秀監修『描かれた動物・植物 江戸時代の博物誌』 国立国会図書館 平成17年  
 『描かれた自然 江戸の植物図』 鹿児島大学附属図書館編 平成18年  
 『高松松平家所蔵 衆鱗図 研究編』 香川県歴史博物館編 平成17年

### 図版一覧

- 口絵 鹿児島県立図書館所蔵『麿海魚譜』 ホウボウ  
 図1 鹿児島県立図書館所蔵『麿海魚譜』 アオブダイ  
 図3 磯野直秀監修『描かれた動物・植物 江戸時代の博物誌』 国立国会図書館 平成17年  
 図4 芳賀徹監修『平賀源内展』 東京新聞 平成15年 105頁  
 図5 早稲田大学図書館ホームページ 古典籍総合データベース 『日東魚譜』  
[http://www.wul.waseda.ac.jp/kotenseki/html/ni15/ni15\\_00712/index.html](http://www.wul.waseda.ac.jp/kotenseki/html/ni15/ni15_00712/index.html)  
 図6 鹿児島県立図書館所蔵『三州物産絵図帳』  
 図7 『高松松平家所蔵 衆鱗図 第一帖』 香川県歴史博物館編 平成13年 11頁 マダイ  
 図8 長崎歴史文化博物館ホームページ 川原慶賀作品データベース マダイ  
<http://www.nmhc.jp/keiga01/kawaharasite/top2/top2.html>  
 図9 京都大学電子図書館 貴重資料画像 『日本動物誌』 魚類編 アカグツ  
<http://edb.kulib.kyoto-u.ac.jp/exhibit/b02/pisces.html>  
 図10 鹿児島県立図書館所蔵『麿海魚譜』 アカグツ  
 図11 『グラバー魚譜200選』 長崎大学水産学部監修 長崎文献社 平成17年 123頁 イトヨリダイ  
 図12 『大野麥風と大日本魚類画集』 姫路市立美術館編 平成22年 33頁  
 図13 狩野博幸監修『伊藤若冲大全』 京都国立博物館 平成14年 140頁

## 魚類学的視点からみた『麿海魚譜』

本村 浩之

明治16年に完成した『麿海魚譜』は、今から130年前の鹿児島の魚類相を知るうえでたいへん貴重な史料であるといえます。描かれている魚の絵の多くは写実的であり、種の特徴がよく表現されています。標本に基づく鹿児島の魚類に関する研究は明治34年まで待たなければならず(本村、2012b)、それ以前の鹿児島の魚の記録として、『三州物産絵図帳(享保19年発行)』と『麿海魚譜』の重要性は計り知れません。

明治44年に刊本『麿海魚譜』の復刻本が出版されました。この復刻本には魚類学者の田中茂穂氏による再同定結果が付記されました。また、肉筆彩色本『麿海魚譜』(図書館本)の復刻版『新編 麿海魚譜』は昭和54年に出版され、本書では当時日本魚類学会会長であった阿部宗明氏をはじめとする専門家による再同定の結果が記されています。

阿部氏は『新編 麿海魚譜』の中で、「(刊本『麿海魚譜』の復刻本で再同定をした)田中先生の時代に、当時の日本の魚学のレベルでは明らかに出来なかったものが、半世紀以上経った現在判然とした例も幾つかある」と記述し、さらに「後世更に多くの種が正しく査定されるかもしれない」と予想しています。実際に『新編 麿海魚譜』で阿部氏が同定できなかった魚の多くを同定することができそうです。例えば、『新編 麿海魚譜』で「キントキダイ属の一種 *Priacanthus* sp. (p.17)」とされているものは「ミナミキントキ *Priacanthus sagittarius* Starnes」、 「シマアジ属の一種? *Longirostrum* sp. ? (p.87)」は「シマアジ *Pseudocaranx dentex* (Bloch and Schneider)」、 「ヒメオコゼ属の一種 *Minous* sp. (p. 101)」は「カゴシマオコゼ *Paraploactis kagoshimensis* (Ishikawa)」と正しく同定することができました。

さらに、『新編 麿海魚譜』では誤同定されている種も多くあります。例えば、「クルマダイ *Pristigenys nipponia* Cuvier (p.19)」は「チカメキントキ *Cookeolus japonicus* (Cuvier)」、 「ムラソイ *Sebastes pachycephalus*

*pachycephalus* Temminck and Schlegel (p.37)は「サツマカサゴ *Scorpaenopsis neglecta* Heckel」、*ニラミカサゴ* *Scorpaena albobrunnea* Günther (p.38)は「ヒレナガカサゴ *Neosebastes entaxis* Jordan and Starks」と再同定されます。『新編 麿海魚譜』が出版されてから30年以上が経った今、現在の魚類学の知識に基づいた再同定の結果を出版すべき時期なのかもしれません。

命名上の問題は、研究が進めば進むほど解決されていく(変化する)ものであるため、『新編 麿海魚譜』の価値が誤同定によって低下することはありません。むしろ、当時の魚類学の知見や考え方、状況などが読み取れるため、ひじょうに貴重な記録であるといえます。例えば、『新編 麿海魚譜』の24頁に「ヤギス」が掲載されており、阿部氏は「東京湾から九州へ分布するが、近年激減している」と記しています。本種は標準和名アオギスと呼ばれる魚で、現在、九州以外の海域では絶滅しており、鹿児島県でも吹上浜にわずかな個体数のみが生息することが知られています(ただし、ここ数年は確認された記録がありません)。『新編 麿海魚譜』の記述によって、少なくともアオギスが当時はまだ東京湾から九州にかけて広く生息していたことが分かりますし(実際は絶滅した直後と思われる)、『麿海魚譜』の絵によって明治前半にも本種が鹿児島に生息していたことが証明されたわけです。

『麿海魚譜』に描かれた魚の多くは市場から入手されたものであるといわれており、その中には鹿児島湾から採集された魚も多く含まれていたことでしょう。大正3年1月12日の桜島大正大噴火によって、桜島が大隅半島とつながり、鹿児島湾の海流が大きく変わったと推測されています。この影響で湾内の魚類相が変化した可能性が示唆されており(本村、2012a)、桜島大正大噴火以前の鹿児島湾の魚類相を知る上での『麿海魚譜』の学術的価値はひじょうに高いといえます。しかし、出版された各版の『麿海魚譜』には、描かれた魚の由来(採集場所や入手経緯)が記されていません。採集場所が分からなければ鹿児島湾の過去の魚類相を知ることもできません。幸いなことに、『麿海魚譜』に掲載された絵の原画には絵師によるメモが残っている場合があります。今後は各絵の記録を調べ、モデルとなった個体の採集場所を明らかにした上で鹿児島の各海域の当時の魚類相を把握することが重要であると考えられます。

『麿海魚譜』にはその美術的価値に匹敵するほどの魚類学的価値があります。今後は、再同定や採集場所の精査を経て、より高い精度で130年前の鹿児島における魚類相を明らかにしていくことが望まれます。

#### 引用文献

- 本村浩之. 2012a. 黒潮が育む鹿児島県の魚類多様性. p.19-45. 松浦啓一(編)黒潮の魚たち. 東海大学出版会, 東京.  
 本村浩之. 2012b. 錦江湾奥の魚類. 鹿児島大学総合研究博物館ニューズレター, 30:15-17.

#### 2012年度イベント報告

- 第17回研究交流会 7/7 「災害と文化遺産—歴史資料レスキューの取り組み—」 松下正和(近大姫路大学教育学部・歴史資料ネットワーク副代表)  
 第12回自然体験ツアー 7/21 「船で行く錦江湾奥と新島探検」 大木公彦(鹿児島大学名誉教授)、鹿野和彦(鹿児島大学総合研究博物館)  
 第12回公開講座 10/20 「封入標本づくり」 三橋弘宗(兵庫県立大学自然・環境科学研究所)  
 第12回特別展 11/1-11/30 「錦江湾奥の自然と人とのかかわり」  
 第22回市民講座 11/10 「錦江湾奥のナゾにせまる」 山中寿郎(岡山大学大学院自然科学研究科)・富安卓滋(鹿児島大学理学部)  
 第9回学内コンサート 11/12 「秋の調べ」 石井いずみ(ヴァイオリン)・海老原麻衣(ピアノ)  
 第23回研究交流会 12/15 「モノとしてのパゴダー・マンマーの巡礼・遺跡・観光—」 土佐桂子(東京外国語大学)

鹿児島大学総合研究博物館 News Letter No.31

■発行/2013年3月15日 ■編集・発行/鹿児島大学総合研究博物館 〒890-0065 鹿児島市郡元1-21-30

TEL: 099-285-8141 FAX: 099-285-7267

<http://www.museum.kagoshima-u.ac.jp/>